

## PROGRAM

## 吉松 隆: 朱鷺によせる哀歌 op.12 (約12分)

Takashi Yoshimatsu : Threnody to Toki, op.12

## プロコフィエフ: ヴァイオリン協奏曲 第2番 ト短調 op.63 ★ (約27分)

Sergei Prokofiev : Violin Concerto No. 2 in G minor, op. 63

第1楽章 アレグロ・モデラート Allegro moderato

第2楽章 アンダンテ・アッサイ Andante assai

第3楽章 アレグロ・ベン・マルカート Allgro ben marcato

— 休憩 (20分) — Intermission

## ドヴォルザーク: 交響曲 第7番 ニ短調 op.70 (約36分)

Antonín Dvořák : Symphony No.7 in D minor, op.70

第1楽章 アレグロ・マエストーソ Allegro maestoso

第2楽章 ポコ・アダージョ Poco adagio

第3楽章 スケルツォ: ヴィヴァーチェ Scherzo : Vivace

第4楽章 フィナーレ: アレグロ Finale : Allegro

指揮: 下野 竜也 Tatsuya Shimono, Conductor

ヴァイオリン: シン・ヒョンス Zia Hyunsu Shin, Violin (★演奏曲)

管弦楽: 兵庫芸術文化センター管弦楽団 Hyogo Performing Arts Center Orchestra

2015 2/20(金)・21(土)・22(日) 3:00PM開演  
兵庫県立芸術文化センター KOBELCO大ホール

主催: 兵庫県、兵庫県立芸術文化センター

※演奏時間は目安となります。前後する可能性がありますので予めご了承ください。

これさえ  
見れば  
わかる!

## 今回の聴きどころ

東条 碩夫(音楽評論家)

## 3つの国の音楽、その鮮やかな特徴の聴き比べ

今回は、日本、ロシア(ソヴィエト連邦)、チェコ——と、3つの国の作曲家が揃い踏みしたプログラムである。これらは、各国のお国柄をそれぞれ見事に映し出した作品と言えるのではなかろうか。日本らしい繊細さ、ロシアらしい骨太の叙情、チェコならではの郷愁の情感——。

吉松隆の名を聞くのが初めての方でも、あのNHKの大河ドラマ「平清盛」の音楽を書いた作曲家だと知れば、がぜん親しみを覚えることだろう。「朱鷺によせる哀歌」は12分ほどの曲だが、その美しさは言語につくし難いほどである。

この叙情美を引き継ぐように始まるのがプロコフィエフの協奏曲で、それはただちにたくましい力感を備えた音楽に展開していく。そして最後のドヴォルザークの「第7交響曲」は、懐かしさと哀愁と、劇的な盛り上がりをもった壮大なシンフォニーだ。あの「新世界交響曲」ほど有名ではなく、やや渋い曲想ともいえようが、聴いてみると実に素晴らしい。

## ライター「必聴ポイント」



## 吉松 隆: 朱鷺によせる哀歌 op.12

## 「吉松ワールド」の粹、陶酔の叙情美

TVの大河ドラマ「平清盛」に流れた、美しく典雅な、<sup>せいひつ</sup>静謐な音楽——その原点がここにある。野性絶滅しつつあった名鳥「朱鷺」への思いをこめて作曲した、吉松隆の出世作。

## プロコフィエフ: ヴァイオリン協奏曲 第2番 ト短調 op.63

## プロコフィエフ独特の叙情感と躍動感

有名な「キージェ中尉」と、バレエ曲「ロメオとジュリエット」の間に作曲されたもの。プロコフィエフの「西欧在住時代」と「ソ連復帰後の時代」との分岐点に位置する名作。

## ドヴォルザーク: 交響曲 第7番 ニ短調 op.70

## ドヴォルザーク特有の「懐かしさ」満載

第3楽章(スケルツォ=諧謔的に)には、どこかで聴いたような、懐かしさを感じさせる不思議な主題がある。飛び跳ねるようなリズムの上に、哀愁を帯びた旋律が流れる。

## PROGRAM NOTE

曲目解説 — 演奏をより深く楽しむために 東条 碩夫(音楽評論家)

## 吉松 隆: 朱鷺によせる哀歌 op.12

初演: 1981年2月19日 東京・新宿文化センター

### 若き吉松隆が世に送った不朽の名曲

「私にとって『鳥』は、音で遊ぶ魂(音楽)の師匠であると同時に、空を飛びひたすら歌を囀る自由なものの象徴」(注1)と語る吉松隆の作品には、「鳥」に因んだ作品が非常に多い。「鳥と天使たち」(交響曲第6番)、「サイバーバード」「バードリズムクス」「デジタルバード組曲」「鳥たちの時代」「鳥と虹によせる雅歌」「鳥たちの祝祭によせる前奏曲」「鳥のシンフォニア」「鳥は静かに」「鳥はふたたび」「鳥プリズム」——などなど。フランスの近代作曲家オリヴィエ・メシアンにも「鳥」に因む作品は多いが、吉松の音楽は、それよりもずっと叙情的で柔らかく、陶酔的で色彩的な美しさにあふれている。何より吉松自身が、刺激的な音響を誇示するいわゆる「現代音楽」の潮流に、真っ向から反旗を翻している作曲家なのである。

「朱鷺によせる哀歌」は、1981年に「現代の音楽展'81」で山田一雄指揮日本フィルハーモニー交響楽団により初演され、彼の名を一躍有名にした作品だ。「1971年春、能登で捕縛された本土最後の朱鷺が死んだ……青空を飛行する朱鷺の姿を初めて写真で見た……泣きたいほど美しかった」と作曲者は言う(注2)。その想いが如実に表れる、美しさにあふれた曲想は、聴き手を夢幻の幻想と陶酔の中に引き込まずにはおかないだろう。

オーケストラは2群に分かれ、指揮者とピアノを中央に、鳥の形のような「右翼」と「左翼」に分けて配置される。

#### 楽器編成

弦楽5部、ピアノ

## Profile

吉松 隆 (1953~)

「少年時代は手塚治虫のような漫画家か、お茶の水博士のような科学者になろうと思っていた」と、自身のサイトのプロフィール欄は書きはじめられている。彼の放送番組やエッセイで示されるユーモア感覚の原点はそのあたりにあるのかもしれない。6曲の交響曲、10曲の協奏曲をはじめ、室内楽曲、ピアノ曲、映画音楽など作品は数多く、その透明感のある叙情美にあふれた作風は圧倒的な人気を得ている。わが国を代表する作曲家のひとり。

## プロコフィエフ: ヴァイオリン協奏曲 第2番 短調 op.63

初演: 1935年12月1日 マドリッド

### 激烈な「第1番」から18年後、作風は大きく変化

1918年、革命後の混乱を避け、日本を経て西欧に亡命したプロコフィエフ。アメリカやヨーロッパでの演奏活動——彼は卓越したピアニストだった——および20世紀欧州の現代音楽の風潮の影響を受けた作曲活動には、それなりの目覚ましい収穫はあった。だが、彼はやがて、むしろに故国へ帰りたくなった。「私は亡命生活には向いていない……ロシア語がいつばいに響くのを聞きたい」と、彼は1933年に語ったという(注3)。おそらく、それが本音だったのであろう。「自伝」には「ソヴィエトの主題で仕事をしたい……社会主義建設の英雄的側面を」(注4)と述べられているが、これは後年、ソ連で書かれたものであるだけに、ある程度「建前論的」なところがあるかもしれないからだ。

ともあれ、1920年代後半から何度か西欧とソ連とを往復していた彼は、ついに1936年初頭には家族をパリからモスクワに呼び寄せ、最終的に故国復帰をはたすのであった。

「ヴァイオリン協奏曲第2番」はその復帰直前、1935年の前半に、各国への演奏旅行のさなかに作曲されたものである。初演場所がスペインのマドリッドとなっているのは、依頼主のヴァイオリニスト、ロベール・スタン(ソータン、ソエタンスという表記も)とともに、南欧や北アフリカへの演奏旅行を続けていたためだった。

音楽の特徴には、もはや「西欧時代」の先鋭的なモダニズム的性格は薄れ、後年のプロコフィエフの音楽に聴かれるような明快さ、平明さ、自然さがあふれはじめている。それは伝統的な手法を継承しながらも、活気と力強い推進性を押し出した音楽なのである。

## 楽器編成

独奏ヴァイオリン、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン2、トランペット2、大太鼓、サスペンド・シンバル、スネアドラム、トライアングル、カステネット、弦楽5部

## Profile

## セルゲイ・プロコフィエフ (1891~1953)

20世紀ロシア=ソヴィエト連邦における最大の作曲家の1人。ペテルブルク音楽院に学び、大胆不敵で前衛的な作風を掲げ、「恐るべき若者」と賛否両論を巻き起こした。ロシア革命に際し一時故国を離れたが、1930年代半ばにソ連永住を決意し帰国。その頃から作風も大幅に変化し、社会主義リアリズムに共感して「大衆に解りやすい」音楽の名作を多く書き続けた。他界したのは1953年3月5日、奇しくもスターリンと同日であった。



## ドヴォルザーク:交響曲 第7番 二短調 op.70

初演: 1885年3月22日 ロンドン

## ドヴォルザークの隠れた「最高傑作」

古くからの音楽ファンは、この交響曲が昔は「第2番」と呼ばれていたことをご記憶かもしれない——つまり現在の「第8番」が昔は「第4番」で、「第9番《新世界より》」が「第5番」だったのである。そんな番号をつけるもとになったのは、ドイツの楽譜出版社ジムロックであった。この出版社は、ドヴォルザークをあまり高く評価せず、小品ばかりを注文するだけでなく、作曲の順序も無視して勝手に番号をつける(「第5番」を「第3番」に)などということも平気でやっていたので、ドヴォルザークはのちに大喧嘩し、出版契約を打ち切ってしまう。今日のような通し番号が確立されたのは、全9曲の交響曲が完全に出そろってからのことであった。

さて、大作曲家ブラームスや、高名な批評家ハンズリックから才能を高く評価されたこともあって、国際的な知名度を高めつつあったドヴォルザークは、1884年3月に初の英国訪問を行ない、自作を指揮して熱狂的な歓迎を受けた。これが縁となり、英国にはその後8回も訪れることになるのだが、その3回目の、1885年春の訪英の際に自ら指揮し

たのが、この「第7交響曲」なのであった。彼は前年、ロンドン・フィルハーモニー協会の名誉会員に推され、また新作交響曲の委嘱も受けていたのである。作曲は1885年の1月13日から3月17日までの間に行われた。初演日ぎりぎりの完成だったことになる。

「神のご加護により、世界を揺るがすような作品にしたい」(注5)と意気込んで書いたというこの「二短調交響曲」は、引き締まった形式美と、豊かな民族色が、完璧なバランスを保って構成されている曲である。この点で、あの有名な「新世界交響曲」や「第8交響曲」をさえしのぐ、彼の「最も優れた交響曲」と讃える人も少なくないほどだ。

不安な悲劇的な情感に満ちた第1楽章、ドヴォルザークらしい哀愁を湛えた第2楽章、活発な動きの中に寂しげな想いをにじませた第3楽章、ドラマティックな第4楽章——どれも素晴らしい。一度聴いたら忘れられなくなる曲である。

なお、わが国では「ドヴォルザーク」が一般的な表記だが、実は「ドヴォルジャーク」が本来の発音に近い。チェコの人々は「ル」を呑み込み気味に、「シャーク」と「ジャーク」の中間に聞こえるような発音をする。わが国でも「音楽中辞典」(音楽之友社)では「ドヴォルジャーク」を、「ニューグローヴ世界音楽大事典」では「ドヴォジャーク」を採用している。

## 楽器編成

フルート2(ピッコロ持ち替え)、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、バス・トロンボーン、ティンパニ、弦楽5部

## Profile

## アントニン・ドヴォルザーク (1841~1904)

チェコを代表する大作曲家の1人。生家は食肉業だったが少年時代から音楽の才能を発揮、スメタナが指揮する劇場の管弦楽団のヴィオラ奏者を務めたこともある。やがて作品をブラームスに認められ、国の内外に名声をあげていった。プラハ音楽院教授、ニューヨークの私立音楽院長、プラハ音楽院長などを歴任、オーストリア政府からも芸術科学名誉勲章、終身上院議員の称号を受け、チェコの国民的大作曲家として栄光の晩年を送った。



- 注1 吉松隆「交響曲第6番」解説(デンオンCD)  
 注2 吉松隆「現代の音楽展'81」解説  
 注3 戸田邦雄「プロコフィエフ」(アテネ文庫)  
 注4 「プロコフィエフ自伝・評論」(園部四郎他訳 音楽之友社)  
 注5 ニューグローヴ世界音楽大事典第11巻(講談社)